（別紙様式３）

2020 年　3 月　27 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　東京都世田谷区太子堂１－７－５７
管理機関名　　学校法人　昭和女子大学
代表者名　　理 事 長　坂東　眞理子

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

2019 年　5 月　16 日（契約締結日）～　　2020 年　3 月　31 日

２　指定校名・類型

学校名　　昭和女子大学附属昭和高等学校
学校長名　　金子　朝子
類型　　グローカル型

３　研究開発名

「都市型社会課題への発信力を育成するクロスサービスラーニングプログラム」

４　研究開発概要

①高校 1 年次を「Think global」期とし、グローバル社会を直接体験する海外交流を中心に、研究の基礎を学びながらグローバルな視野を育成する。②高校 2 年次を「Act local」「Act global」期、高校 3 年次を「Go Glocal」「Go Global」期と設定し、大学や自治体と連動して自らが地域のために実践・発信する社会参与学習「サービスラーニング」、世界で活躍できるリーダー像を探究する「LABO 活動」を実施する。

世田谷区で進められている、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた地域住民の参加によるボランティアや PR 活動の拡充などの取組みへの参加を中心に、大学や企業・地域自治体と緊密に連携した社会参与学習プログラムを編成し、本校のグローバルプログラムと、地域貢献型サービスラーニングとを有機的にクロスさせ、国際的素養を地球規模の課題だけでなく地域課題の課題と結び付けて考え、自分なりの解決プランを実践できるグローカル人材を育成する。

５　教育課程の特例の活用の有無

なし

6　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程（数字は会合等実施回数）										
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会						1	1			1	
コンソーシアム会合(打合せ)		1		1	1	1	1	2		1	
その他コンソーシアム関連の取組み	1				1			2			

①．コンソーシアムの構成団体

公益財団法人 世田谷区産業振興公社

社会福祉法人 世田谷ボランティア協会

世田谷区 経済産業部

世田谷区 生活文化部

②．具体的な活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年6月	コンソーシアムを組織して地域活動の場を形成
令和元年5月15日	LABOアドバイザーとしてジャーナリストの白河桃子氏が新任。活動に関する打ち合せを実施。
令和元年8月6日	世田谷区産業振興公社との初回打ち合わせ。 サービスラーニングで生徒が取り組む課題を、効果的に把握する方法を協議し、テーマごとに生徒の活動をサポートする「地域協働学習支援員」設置を決定。
令和元年9月3日	サービスラーニング地域協働学習支援員4名によるグループ別トークセッション「テーマ：世田谷区の抱える課題」を開催。
令和元年10月31日	世田谷区生活文化部 市民活動・生涯現役推進課と協議。オリ・パラに関するボランティア活動を調査。区の協力と生徒のボランティア派遣を決定。
令和元年11月19日	世田谷区産業振興公社との第2回打ち合わせ。 「世田谷おもてなし・交流・参加プロジェクト」実行委員会が会議に生徒が参加することを承諾。
令和元年12月3日	第1回コンソーシアム全体会議。 サービスラーニングの課題整理とテーマについて協議。次年度に実施するプロジェクト活動の検討と世田谷区のオリ・パラ関連事業の企画会議への生徒参加を承認。
令和元年12月16日	しもきた商店街振興組合を訪問。 サービスラーニングへの協力を依頼。生徒と協働するプロ

	ジェクト活動を立ち上げることが決定。
令和元年 12 月 17 日	世田谷区産業振興公社との第 3 回打ち合わせ。 世田谷区が進めるオリ・パラ関連事業への生徒参加について協議。企画段階からの参加が提案され、令和 2 年 1 月 22 日に第 1 回の区関係者との合同企画会議が決定。
令和元年 2 月 18 日	成果発表会についての見学説明 （発表会後に運営指導委員会を続けて実施）

③ 地域協働学習実施支援員について

…指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

世田谷保健所 健康企画課　日永田俊成 氏

世田谷区 経済産業部 産業連携交流推進課　佐藤智和 氏

三軒茶屋銀座商店街 振興組合　小山　恵 氏

＊いずれも無償・アドバイザーとして参加。

〇実施日程・実施内容

日程	内容
令和元年 9 月 3 日	「世田谷区の課題を知る合同講演会」を開催。区が直面する現代的課題について分野ごとにセッションを実施。

実施後はメール等で生徒が連絡をとれるようにして支援を受けている。

④運営指導委員会について

〇運営指導委員会の構成員

世田谷区　岡田　篤　副区長

公益財団法人 世田谷区産業振興公社 小田桐康文　副理事長

同　小湊芳晴　常務理事

社会福祉法人 世田谷ボランティア協会 興梠　寛　理事

〇活動日程・活動内容の詳細

活動日程	活動内容
令和元年 10 月 10 日	文部科学省の視察に本事業の関係者として小湊芳晴常務理事が出席。
令和元年 11 月 19 日	世田谷区役所区長会議室で副区長の運営指導委員就任を依頼。サービスラーニングの概要説明と世田谷区への協力を決定。
令和２年 2 月 18 日	年度末の報告会。今年度の活動の振り返りと次年度方針の決定。

（２）実績の説明

①. 管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

A. 本事業の基礎となる地域コンソーシアムを形成。世田谷区長室・世田谷区産業政策部・三軒茶屋銀座商店街振興組合・しもきた商店街振興組合との協力関係を構築。

B. 校内組織を編成。本事業の特長であるグローバル・ローカルそれぞれの担当責任者を任命。高校１年生・２年生の学年主任を取組責任者とした。

C. 高大連携組織を形成。大学教員による講義と海外研修旅行への同行、サービスラーニングの目的と意義など、専門を活かした指導の支援を担当。

D. 大学組織による支援。世田谷ボランティア協会と連携する大学のコミュニティサービスラーニングセンターが、生徒のボランティア活動の安全性を確保。

②. 事業終了後の自走を見据えた取組について

生徒の地域活動を継続させるため、世田谷区産業振興公社と相互協力協定書を締結する計画。

③. 高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

世田谷区と昭和女子大学が包括協定を締結している。附属校も対象であるため協力関係は構築できている。

7　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施期間（　契約日　～　令和２年３月 31 日　）										
	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
SDGs キャリア講演（模擬国連含む）	○		○	○		○	○	○		○	
LABO 研究	←		海外研修				随時企業訪問等				→
選択制国内外研修旅行								研修			
サービスラーニング	←										→
アカデミックスキルトレーニング	←		→		9 月以降は活動状況に応じて数回実施						

（２）実績の説明

①. 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

A. ローカルプログラム（LP）

地域が抱える課題の発見と解決に向けて、生徒自身が地域と協働してアクションプランを策定する探究学習・サービスラーニングを全学年で実施。１年次で課題発見と研究目標の設定を行い、２年次は解決のためのプラン策定と実行が目標。

初年度は継続的活動の基礎をつくり、地域との協働プロジェクトとして立ち上げた取り組みも試行できた。２年次の活動をまとめ「全国高校生マイプロジェクトアワード」に出品。2020 年１月現在、24 チームが第１次予選を通過している。

1-1　本年度の活動例

新宿と世界をつなぐ＝現地取材や調査による外国人への案内の改善案提案と実行

多様化するしもきた商店街を発信しよう＝外国人や若者が増加する商店街の情報

発信法を提案（提携先：しもきた商店街振興組合）
世田谷区おもてなし実行委員会＝東京オリ・パラを区民と盛り上げるイベントを世田谷区と協働で企画（提携先：世田谷区産業振興公社、世田谷おもてなし・交流・参加実行委員会）

1-2　外部人材による指導・講演会
区関係者やボランティア協会・商店組合などの諸団体や関係者と協力して活動プランを策定。学校に招聘して生徒向けの講演会を実施した。
○ 6 月 25 日：三軒茶屋のイベント・フードドライブ
講師：三軒茶屋銀座商店街広報担当　小山　恵 氏
○ 9 月 3 日：世田谷区の課題を知る合同講演会（前述）
○ 9 月 3 日：ビジネスのためのプラン考案～ビジネスプラングランプリ
講師：日本政策金融公庫 東京創業支援センター 小池俊太郎 氏

②. 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間，学校設定教科・科目等）
A. 活動は 1・2 年次の総合的な探究の時間、ロングホームルーム（週 2 時間）、課外活動、3 年次のロングホームルーム（週 1 時間）で実施。
B. 3 年次の活動を充実させるため次年度より総合的な探究の時間を 1 時間開設。

③. 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について
A. 活動のクロス化と授業開発
活動成果の有機的な結合を図り、特定の知識や方法に偏らない総合的な学びの力を育成し、地域課題解決に役立てるため活動相互のクロス化を実施。
1-1　「グローバル」と「ローカル」のクロス化
生徒のグローバルな体験とローカルでの活動とをクロスさせて内容的な横断を行うため、研究の過程や成果の相互発表などを連動して学ぶ機会を用意。
○ LABO 夏季研修旅行発表　（10 月 1 日）：体験者が研修の成果と課題解決に必要な視点などを全生徒に発表した。生徒が研修を充実させる意識を共有。
○ e-ポートフォリオ活用：e-ポートフォリオを用いて、個人の体験や感想を記録させ、グローバルとローカルの活動を生徒自身で整理することが可能。
○ 選択制研修旅行と探究活動：選択制研修旅行では SDGs を活動に組み込み、日常の生活や授業、サービスラーニング、LABO 研究とのつながりを明確化。
1-2　各授業と探究とのクロス化
○ 各教科の授業開発は本事業とのクロス化を進めるため、think global・think local・act global・act local・thinking skill・active skill、そして SDGs の視点で指標を設定し、授業と教材の開発を進めた。研究授業は探究的な資質や能力育成のための指標を採用して開発を推進。
○ 教科や探究の方法的横断機会の構築のため、中学校も含めた系統的なカリキュラムの構築を開始。デザイン策定や授業開発のため統一した指標を設定し、本事業とのクロス化を意識し、SWOT 分析法などを用いて本校の課題や長所を可視化して中高 6 年を通じたカリキュラム・マネジメントを行うよう配慮。

④. 類型毎の趣旨に応じた取組について
A. アカデミックスキルトレーニング（AST）
1 年次前期に設定する研究スキル育成プログラム。今年度はロジカルシンキング、と課題の立て方（全 2 回）、情報収集の方法、情報の分析・活用、論理的・批判的思考とまとめ方、を全 6 回実施。
B. グローバルプログラム（GP）
○ 選択制海外研修旅行＝1 年次 12 月に実施。事前学習では訪問国の課題に関するテーマを設定して探究活動を実施。LABO やサービスラーニングにつながるよう SDGs の 17 項目を軸として、宗教・文化、開発、共生などのテーマを設定して発表などを行い調べた項目を共有した。国を取り巻く課題、共生、日本との関わ

りについて探究。自分の考えや意見を構築。
海外研修旅行は 1 年次 12 月に実施。同世代の人たちとのワークショップや現地で活躍する日本人と交流するなど、生涯のキャリアを考える機会とした。
ベトナム：開発や平和などをテーマに、死滅した森林の再生、戦争などを考え、日本企業を訪問。
マレーシア：環境、宗教・文化などをテーマに、現地高校生と協働でボランティア活動やモスク訪問を実施。
オーストラリア：共生、交流などをテーマに、現地で活躍する日本人女性と意見交換し、現地高校生と交流。ファームステイで生活に密着体験。

○ LABO 研究＝1 年次・2 年次各 20 名程度 2 学年混合の 4 グループ（LABO）を形成してプロジェクト研究を実施。企業や大学教員が指導を担当。コミュニケーション力や多面的視点など、総合的な素養を育めるようにディスカッションやグループワークを実施。海外研修を LABO ごとに実施。外部講師は夏季の海外研修旅行に同行。今年度の各 LABO の研修先とテーマは以下の通り。
LABO1（アメリカ）：次世代を担う私たちが考えるキャリアデザインの研究
LABO2（フィンランド）：日本人ジェンダーギャップの研究
LABO3（カンボジア）：海外で活躍する日本人リーダーの研究
LABO4（タイ）：多文化共生とボランティアの可能性

○ グローバルイシュープログラム（SDGs キャリア講演）＝世界規模の課題に対する自分の意見をまとめる機会を設け、ローバルな視野を育み将来リーダーとなれる課題解決力、コミュニケーション能力、キャリアデザイン力などを身につけるため、SDGs を主テーマとしたキャリアや諸課題に関する講演を実施。中学とのつながりを意識し、高校だけでなく中学までを対象とし、幅広い参加者によるキャリア講演会を全 5 回実施。

7 月 20 日＝模擬・国連カフェ：SDMs と生徒有志が実施
10 月 25 日＝使う責任、捨てる責任：講師 テラサイクルジャパン
11 月 15 日＝国連と SDGs の基礎知識：講師 国連広報センター 千葉　潔氏
12 月 13 日＝カードゲームで学ぶ SDGs：講師 未来創造サポート 寺島義智氏
2 月 14 日＝途上国に出会ってぼくの人生は変わった：講師　杉谷遼氏

⑤. 成果の普及方法・実績について

○ 学校公式ホームページに本事業の特設サイトを構築。生徒が仮アップした取組の様子や記事を担当教員が公開できる仕組みを完成。
○ 文化祭で LABO 研究の成果報告、サービスラーニングのポスター掲示。
○ LABO 研究の海外研修報告を校内で学期初め等に実施。
○ 「He For She すべての人が輝く社会を目指して～Generation Z からの提言～」を資生堂 ＵＮ Women と共催（令和元年 10 月 6 日）
○ SGH・グローカル等カンボジア合同研究会（令和 2 年 1 月 11・12 日）
○ 文部科学省主催「全国高校生フォーラム」（令和元年 12 月 22 日）ポスターセッションとディスカッションに参加。
○ 総合的な探究全校発表会（令和 2 年 2 月）LABO・サービスラーニング成果発表
○ グローカル探究成果発表会（令和 2 年 2 月予定）コンソーシアム関係者、区民、高校生などを招待し LABO のワークショップとサービスラーニングのポスターセッションを開催予定。
○ その他　広報誌『中高部通信』で保護者向けに紹介。
高校生マイプロジェクトアワードへ出品し 24 全チームが書類選考を通過し、地域サミットにオンラインで出場。
中学 1 年生主催の模擬国連を高校生が支援、浅野中学・駒場東邦中学を招き模擬国連を共催し SDGs や世界平和を考える機会を提供。

8　目標の進捗状況，成果，評価

【目標１】東京オリンピックをはじめとする世田谷区が今抱える課題に敏感になり、「社会的・倫理的責任感」、「人間性」を育成して、コミュニティと積極的に関わろうとする人

材を育成する。

①. 世田谷区のオリ・パラに向けた活動が開始した状況。友好的な協力関係を構築する。
②. 世田谷区でのボランティアなどの活動は、サービスラーニングに取り組んでいる生徒の約半数以上が実施している。次年度は区内での活動の割合をさらに高めていく。
③. 生徒アンケート等を活用した数値的な指標を増加させていく。

【目標２】社会的な人材育成を行うための探究活動プログラムを体系的に構築し、論理的に物事を考える能力を育成する。

①. 研究手法の習得をねらいとする AST（アカデミックスキルトレーニング）を 1 年次前期に 6 回実施。GPS アカデミック（思考力テスト）も同学年で実施。探究を実践行動に移す段階は 2 年次なので、1 年次の GPS の結果も踏まえて弱点を補強しながら次年度の活動に着目したい。
②. 系統的なカリキュラム・マネジメントの作成・運用を開始。教科間の横断的な授業開発、中高の探究活動の連続性を高める取り組みを効果的に運用させたい。

【目標３】グローバルな取り組みと地域探究など諸活動をクロス化させることによって探究活動の質の高度化をはかり、総合的な学ぶ力を育成する。

①. 探究活動と各教科との内容・方法を横断する授業の開発は、SDGs や探究スキル開発を軸として実施。主に社会科や英語科を中心に進めた。1 年次の現代社会をグローバルの基軸授業として位置づけ、「SDGs 開発教育」授業を通年 12 回実施して選択制海外研修旅行とのクロス化を図った。LABO2(ジェンダー)、LABO3（カンボジア起業）グループが SDGs の視点を新たに取り込み、生徒主体による活動も見られた。
②. 高校 2 年次の英語で模擬国連を活用した授業を設定し、The British School in Tokyo の生徒も参加したクロスカリキュラムを実施。
③. 本年度は全教員が研究授業を実施。授業開発の指標、think global、think local、thinking skill、active skill、を研究対象とした研究授業の延べ数は以下の通り。
   ○ think global＝3（高校）
   ○ think local＝7（中学 2・高校 5）
   ○ thinking skill＝52（中学 27・高校 25）
   ○ active skill＝61（中学 33・高校 28）
④. グローバルとローカルの探究、1 年次と 2 年次、中学と高校、The British School in Tokyo などとの協働のクロス化は、研究成果の共有や発表・セッションの参加・見学などの形で、年度内に延べ 6 回の機会を得た。
⑤. LABO2（ジェンダー）は活動の成果物（ジェンダーかるた）を区内公立小学校に普及させる活動を開始。世田谷区議会でも取り上げられ、世田谷区内の公立小中学校のジェンダー教育に取り入れる動きを世田谷区教育委員会と進めている。
⑥. カリキュラム・マネジメントの視点から、「本校の育成したい生徒像」と「具体的な手立て」を各分掌・教科ごとに作成した。年間の活動をカレンダー化して、探究活動を軸に横断的な授業や教科どうしの関連性が視覚化できるようにした。継続的な運用ができるように、PDCA を回していく。

【目標４】生徒の中に、地域のためにより有益な行動をしようとする意識を涵養していくために、恒常的な産官学連携・地域連携コンソーシアムを形成する。

①. サービスラーニングでボランティア活動を世田谷区内で実施したグループは約半数、60 以上の団体・企業などで活動した。
②. 世田谷区、世田谷区産業振興公社などの支援でしもきた商店街、世田谷区おもてなし実行委員会などと大型プロジェクトが実現し、特に東京オリ・パラ開催を機に区民がつながりレガシーを残すことを目的としたイベントの企画会議を校内で開催し、生徒の意見をイベントに取り込む機会を設けた。
③. 次年度の活動に向けて、コンソーシアム構成団体企画によるボランティア活動、学園

内の CSL(サービスラーニングセンター)の企画によるボランティア活動を準備し、コンソーシアムによる事業参画をよりはっきりとした形で打ち出す。

＜添付資料＞目標設定シート

9　次年度以降の課題及び改善点

①. コンソーシアムを活用したグローカル人材育成の充実

今年度は、グローバルな視野を持ってローカルな視点で地域の活動にとり組む意識づけが不十分であった。研修の機会をその場だけで終わらせず、グローバル段階で育んだ多面的視野を、どうローカルな視点に結び付けていくかの教材開発が必要である。また、コンソーシアムの活用がサービスラーニングに偏っていた点も改善したい。

次年度は、コンソーシアムを活用し、学年グローバルプログラムやユネスコスクール講演会において、グローバルに活躍する世田谷区の人材・企業を招いての講演会などを充実させ、世田谷区のグローカル人材開拓をすすめることを通じて、グローカル意識を育てる。

また、LABO 研究においてもコンソーシアムを積極的に活用し、LABO の世田谷区内でのローカルな活動を強化することで、LABO 研究でもグローカル人材の育成を行う。各 LABO で世田谷区での活動や企業・団体訪問に関してコンソーシアムを活用し、各 LABO のテーマに合わせた地域人材・企業・団体との交流を促進させ、グローバルプログラムの生徒に対するローカルへの志向を高める。

・活動の例

LABO１：区のキャリアデザイン関連事業との協力連携
LABO２：ジェンダーカルタの区内公立学校への普及、世田谷区の取組みとの連携
LABO３：区内のカンボジア関連企業との連携、区内 SDGs の取組み企業訪問
LABO４：フェアトレード企業とのコラボ、世田谷区のフェアトレードタウン化

②. コンソーシアムの積極的な活用と管理機関との連携強化による活動プログラムの充実

プログラムの計画・実施にあたって、管理機関の統括の下で、カリキュラム開発全体にコンソーシアムが組織的に関われるような仕組みづくりを進める。

サービスラーニングでは、今年度、生徒が活動先を探しにくい状況が見られた。ボランティア先の開拓を生徒自身に任せても難しい状況があり、運営指導委員会でもその点について「こちらから企画や活動先を提示するほうが、活動がよりスムーズに地域に合ったものになるのではないか」との指摘があった。そこで、活動のカテゴリ化、マッチング機能の充実をコンソーシアム協力のもと進め、学内 SLC（サービスラーニングセンター）や世田谷ボランティアセンター、世田谷区などコンソーシアム構成団体に活動プロジェクトの提案を依頼するなど、活動を軸に各団体との連携の緊密化を図る。

また、ローカルプログラムでは、コンソーシアムの人材開拓力を生かした地域の人材の掘り起こしを進め、地域人材による講演や活動支援の機会を増やし、生徒の地域意識の醸成、ローカルへの志向性をさらに進める。高校 1 年生の段階でも、世田谷区の課題を知る地域ツアーなどを実施し、ローカル活動への意識を育むようにする。

③. クロス化の充実　＝PDCA による生徒把握と SDGs など明確な指標の設定

今年度の活動のクロス化は、活動の成果発表やグローバルな思考を共有する取り組みにとどまった。そうしたブリッジ的な取り組みだけでなく、生徒のグローバル観や思考そのものに働きかけ、それを自身の経験として生かすことができるような PDCA を意識した取り組みになるように、「e-ポートフォリオ」の徹底や、ルーブリックやアンケートによる生徒の状態の数値的な把握を進める。

各教科では、探究活動との方法論的なつながり・横断をもった授業は think global、think local、thinking skill、active skill の指標をもとにした研究授業に多くの先生方が取り組み、裾野が広がった。ただ、探究活動との内容的なつながり・横断を重視した授業はあまり多くはなかったのが現状である。

今年度の現代社会で成果のあった SDGs を基軸にした内容的な横断を意識した授業開発を参考に、次年度は SDGs を軸に様々な教科で内容的な横断を深める授業開発を増やしていけるようにする。

④. カリキュラム・マネジメントの継続的な活用。

カリキュラム・マネジメントは、今年度作成した各教科・分掌ごとの活動カレンダーをもとに、各教科や学年の担当ごとに実施結果やその改善点などをまとめていく具体的な授業プラン作成段階に入る。PDCA サイクルをしっかり回すようにして、継続的に活用できるようにする。

総合的な探究の時間の活動カレンダーと各教科のカレンダーとを照合して、横断的な授業や活動の関連性を視覚化し、授業開発案作成の指標にできるように運用を進める。

⑤. 3 年次活動を策定　＝高校 3 年間を通じた体系的な活動づくり

高校 3 年次の「Act Glocal」の段階の活動を本格的に策定・試行する。活動成果については論文にまとめたり、世田谷区などに発表する機会を持ったりして、自身の活動が一過性のものにならないように工夫しながらも、これまでの活動を単にまとめるだけでなく、自らのキャリアデザインや進路決定に生かしていくことができるような教材開発を、進路指導部との連携の下で進める。高校 3 年間を通じて本校のグローカル事業で育みたい生徒像を総合的・体系的に育成するプログラムを策定する。

⑥. 本事業の周知と参加者促進を図り全校活動となるよう推進

今年度は学校ホームページに専用ページを設け、活動の広報の素地を整えたほか、附属中学生にも高校の探究活動に参加する機会を設け、校内での周知を図った。

次年度は、ホームページを用いた教材の頒布など、区内の学校にも本校のプログラムやコンソーシアムの一部を積極的に公開し、外部発表会への参加も積極的に進め、学校外にも活動の普及をめざす。

また、校内会議でも報告や研修の実施、各校務分掌との連携によって、学校内外での活動の補完・拡充体制を構築する。大学等の学外連携の教材開発・講師派遣には本校の進路部、同じ校舎内にある中等部との活動の関連付け、各教科の活動啓発、ICT 環境の整備については教務部、初等部との連携・情報発信は入試広報部、生徒組織の運営指導、ユネスコスクールの活動との関連付けは指導安全部との連携の下で、学校全体で組織的に体制を構築し、探究プログラムの深化・体系化を図っていく。

【担当者】

担当課	昭和女子大学附属昭和高等学校	TEL	03-3411-5115
氏　名	勝間田　秀紀	FAX	03-3411-5532
職　名	教諭（教務部教育研究主任）	e-mail	n-sgh@swu.ac.jp